

第9章 回りモノ

著者	佐藤 寛
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
シリーズタイトル	アジアを見る眼
シリーズ番号	100
雑誌名	イエメンものづくり：モノを通してみる文化と社会
ページ	199-226
発行年	2001
出版者	日本貿易振興会アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00017654

第9章

回りモノ



ティハマ最大の金曜市，ベイトル・ファキーフ

銀

「かねは天下の回りもの」というが、江戸時代の上方では「かね」に「銀」の字をあてていたという。それは大阪の米相場をはじめとする経済が銀本位制で動いていたからである。アラビアにおいてもまた、長きにわたって銀 ファッザこそが交易決済の手段であった。現代イエメンでは「百ドル紙幣」が唯一信頼できる貨幣である（トラベラーズチェックはあまり信頼されていないので、交換レートが悪いし、一〇ドル、五ドルなどの少額紙幣は扱いが面倒なので交換率が悪い）ように、十八世紀以降二十世紀半ば過ぎまで、この地域で最も信頼され、流通していたのはオーストリアで鑄造された「マリア・テレサ・タラー」銀貨であった。

もちろん、貨幣の鑄造は暦の使用と同様に「支配」の象徴であるから、サナアでもイマームの名前を刻印した「リヤル銀貨」（マリア・テレサとほぼ同サイズ）が鑄造されていた。しかし鑄造能力が低い（マリア・テレサを鑄つづけてつくったこともあるという）ために発行量は限られている上、銀の含有量も安定せず、イマームが変われば変更される可能性があるという意味でも長期的な信頼度が低く、国内の取引でさえマリア・テレサ銀貨が好んで用いられたのである（マリア・テレサの純度は〇・九九三で最も信頼度が高いという）。

もちろん、銀本位制であるから、マリア・テレサ銀貨以外でも、銀の含有量が信頼でき

れば世界中の銀貨が通用可能であつた。時々サナア旧市街の骨董屋で明治日本の一円銀貨（私は明治三年、明治六年、明治二十七年のものを見たことがある）や同サイズ・同品質の「貿易銀」（一円銀貨と同サイズで英語で「ドル」と標記してあり明治六年の刻印がある）を見かけることがあるのは、明治日本の留学生（鵠外や漱石である）が洋行の道すがら、アデンに寄港し、そこで買い物をして、それがめぐりめぐって山岳地まで回つて来たのであろう。当然ながら銀本位制においては、銀貨は単なる記号としての貨幣にとどまらず、現代の「金塊」と同様な資産価値をもつ。したがつて、女性の装身具のパーツとして銀貨が用いられるのは、見た目の美しさを追求するというよりも「資産を持ち運びしやすくする」という目的のほうが強いの。例えば銀貨一枚が牛一頭に相当するのなら、五枚の銀貨のつながつた首飾りをもつ女性は牛五頭分の資産をもっていることが誰の目にも明らかである。

こうして、結婚式の花嫁はどれほど美しいかと同様、どれだけ多くの銀で身を飾れるかが勝負となり、大きくて胸一面を飾り立てるような胸飾りにはふんだんにマリア・テレサをはじめとする銀貨が用いられるのである。そして銀貨のみならず、銀を使用した裝飾品も工芸的な美しさよりも、鑄つづいたときの目方で評価される。腕飾り、それを二回り大きくしたような足飾り、耳飾り、はちまきのように巻きつける頭飾りなど、日本人女性は

けっして身につけないような大振りな装身具が多いのは、アラブ人の美的感覚もさることながら、この経済的な理由が背景にあるのだ。

花嫁が結婚式の当日に身にまとうそれらすべての銀製品は彼女の生涯の全財産なのである。なぜなら普通の農民に嫁いだ場合、結婚したあとに彼女が手持ちの銀を増やすことはほとんどあり得ない。だから、夫やその他親戚の男たちが甲斐性なしであれば、生きていく上でのさまざまな出費は彼女の銀を売ることによってまかなわなければならないのだ。

もちろん、資産としての銀をもつのは女性だけではない。すでに述べたように銀製



嫁入りのための銀製品一式。左から時計回りに頭巾、額飾り、胸飾り、イヤリング、首飾り、プレスレット。

のジャンピーアの鞄、ベルトに取りつけるコーラン入れ、アイシャドー入れ、弾薬入れに指輪などには銀製品が多く、いざというときには現金に替えられる。

サナア旧市街の中心部に「銀スーク」と呼ばれる一画がある。ひと頃この近くの民家に住んでいたため、私には銀屋の友人が多い。こうした友人の店の奥でカートを噛みながら過ごしていると、安くて素敵なお土産はないかとやって来る外国人に混じって、いささか貧しい身なりをした、いかにも田舎からお金を工面にやって来たとおぼしきイエメン人が「銀を買ってくれんかね」と店に入ってきて来ることがある。女性が一人で来ることもあるのは、それらの銀製品が彼女たちの持ち物で彼女たちが処分権をもっているからであろう。何のために彼らが銀を売る羽目になったのか、を想像すると心が痛むのだが、しかし私の友人たちはほとんどの場合彼らの風体を一瞥すると、銀製品の善し悪しを確かめてみようともせず「いらないよ」とつれなく追い返すのだ。そうすると、その人たちは落胆した様子で、隣の店に向かう。銀製品は単なる工芸品ではない、と実感するのはこんなときである。

装飾品としての銀

とはいえ、外国人にとってアラビアの銀製品は、装飾品、工芸品として価値がある。装飾品として見る場合には、銀を引き立てる脇役

も重要で、指輪やペンダントにはめ込まれるワイン色の紅玉髓　アギーゲ　はいエメンの特産だし、ネックレスでは紅海、ペルシャ湾産の赤珊瑚　マルジャー　が銀と組み合わせられる。黄色みがかって透明感はないが四センチ角と大振りなイエメン産琥珀　アンバル　もイエメンの胸飾りには欠かせないパーツである。

かつてイエメンには数万人のユダヤ教徒が住んでおり、彼らは銀製品をはじめとする工芸品の作成にその才能を発揮していた。サナア郊外の「ベイト・ボウス」村はそうしたユダヤ教徒の住む村であり、ここでつくられた銀製品はとくに「ボウサーニー」と呼ばれ、その細工の細かさで有名であった。こうしたユダヤ教徒たちの大半は、一九四八年のイスラエル建国時に「魔法の絨毯作戦」と呼ばれた大量移動キャンペーンによって移住して行ってしまう、現在ではイエメン全土に数千人しか残っていない。

残念ながらイスラム教徒のイエメン人にはユダヤ教徒ほどの技量をもった人は少なく、細工の良い銀製品を外国人がどんどん買っていく、優れた工芸品は年ごとに減っていくのではないかと思われる。ところが、一九九〇年代後半から銀製品を扱うお土産屋は雨後のタケノコのごとくに新規開店している。彼らはいったいどこから売り物を仕入れるのか。どうやら銀屋・お土産屋が銀製品を仕入れるには五つの方法があるらしい。一つは上述

したようにお金に困った人が直接銀スークに売りに来る場合である。しかし、こうした場合、値打ちのある物が転がり込むことはほとんどないという。二つ目はイエメン中をわたり歩く専門の買い付け人から仕入れる方法である（日本の骨董業界にもそういった人がいるらしい）。彼らが地方のスークや民家から掘り出し物を買いつけては、サナアやタイズの銀スークの店主に売るのである。かつての名家が経済的に傾いた、などという情報入手すれば彼らは掘り出し物を求めて群がるのであろう。三つ目は「自分で見つける」ことである。私の友人の一人はシバの女王の遺跡があるマ



サナア旧市街の銀スーク。間口1間ほどの店が数十軒並んでいる。

ーリブ近くの砂漠を掘る権利を地元部族から買い取り、フェンスで囲って人足を雇って発掘していた。こうして文字どおり「掘り出し」た骨董は海外では博物館モノである。また、南北が統一してからはハドラマウト地方から多くの逸品が出ている。彼らは買いつけ屋に依存するばかりではなく、自らこうした地域に買いつけに出かける。

四つ目は「つくらせる」である。イエメンのもととの銀製品は純度九九%のものが多かった。しかし現在では「なるべく安く値切って買いたい」観光客のニーズに应运、かなり純度の低い模造品をみやげもの屋で見かけるようになった。初めて訪れる外国人には本物との区別はつかないから、それなりによく売れている。こうした品物の多くはティハマ地方の農村部でつくられているらしい。観光客が求めているのは「イエメンらしいお土産」であり、骨董でなければならぬというわけではないから、実際にイエメンで製作されているこうした品々を一概に「まがい物」と決めつけるわけにはいかないだろう。

五つ目は嘆かわしい方法である。一九九〇年代の初め頃から、伝統的なスタイルを真似してはいるが、イエメンのスタイルとはことなく異なり、やや小振りな宝石入れとか、コフル（アイシャドー）入れが出回りはじめた。素材も銀のように見せて実はほとんど銀ではない。しかしどこことなくあか抜けていて、大きさも手頃なのでお土産にはもってこい

なのだ。聞いてみるとインド・ネパールからの「輸入品」なのだという。とりえはともかく安いことで、銀スークの友人たちに言わせるとイタリア人とドイツ人は安ければ買うのだそうである。アラブとも、イスラムとも接点の少ないところで作成された製品がアラブ・イスラムのイエメンで販売される。お土産とはそういうモノかもしれない。

さらに一九九〇年代後半に登場したのはオレンジとピンクの中間色の琥珀のような素材を利用したさまざまな銀（もどき）製品であった。コーヒポットや宝石箱など、従来イエメンにはまったく存在しなかったデザインの商品が回り、私はかなりの違和感を感じたのだが、店先に陳列するとかなり目立つので、売れ行きはよいようである。ただしこれらは「老舗」の銀屋では販売しておらず、九〇年代前半の観光ブーム期に参入した新規の「土産物屋」の売れ筋商品なのだ。そしてこれらはモロッコをはじめとするマグレブ（北アフリカ）諸国からの輸入だという。

いかに生活がかかっているとはいえ、イエメンの伝統とはまったく切り離されたモノを、あたかもイエメンの伝統工芸であるかのような顔をして売るのはけしからん、と抗議の一つもしたくなるのだが、店主たちは「客から質問されれば、イエメンの物ではないことを正直に言うが、聞かれなければわざわざそんなことは言わない」と言う。それはそうだと

う、勝手に誤解したほうが悪いのだ。それに、よく考えてみれば、アラブ世界に初めて足を踏み入れる外国人であれば、そして二度とアラブ世界には来ないのであれば、イエメンでモロッコの土産を買っても別にかまわないではないか。外国人に東京で沖縄のお土産を売って何の不都合があるうか。

とはいえ、イエメンのような最貧国にまで銀製品が輸入されるのも奇妙な感じがする。需要のあるところにモノは流れる。やはり銀は天下の回りモノなのである。

通貨
もちろん、現代では日常的に流通しているのは国が定めた通貨である。このコ

インと紙幣のデザインや発行の背景もまた、その時々 of の社会のありようや政治状況を反映している。

アラブ世界ではもともと「ディナール」が金貨の単位、その一〇分の一の「リヤル」が銀貨の単位として相互補完的に用いられていたようだが、現在アラビア半島各国の通貨単位としてはサウジアラビアやオマーンなどは「リヤル」、クウェートやイラクは「ディナール」を用いており、アラブ首長国連邦の「ディルハム」は両者の中間的な位置づけである。通貨の補助単位としてアラブ世界でよく用いられるのは「フィルス」で、フィルスは「お金、ぜに」一般を指す言葉でもあり、日本語の「一文無し」に相当するのは「一フィ

ルスもない」マーフィッシュ・フィルルス という表現である。通常はリヤルの一〇〇分の一が一フィルスである。

イエメン北部ではイマーム時代から「イエメン・リヤル」(YR)が、南部ではイギリス植民地時代は「デイルハム」、一九六七年の独立以降は「イエメン・ディナール」(YD)が通貨単位として用いられてきた。九〇年に南北イエメンが統一したとき、両国の経済力の差を背景としてリヤルが統一通貨として選択され、コインも紙幣も北イエメン時代のものが継承された。ただし経過措置として統一後数年間は両通貨が併用され、全国どこでも「ディナール＝二六リヤル」で問題なく交換されていたが、九〇年代後半になるとアデンでもほとんどディナールを見かけなくなった。

北イエメンの近代通貨も、初めは銀貨から始まっている。開国革命後最初に発行されたコインには一九六三年の刻印があり、マリア・テレサ型を継承した直径四センチほどの「リヤル」銀貨であった。表にアラビア語で「イエメン・アラブ共和国」と新しい革命国家の名が誇らしげに書かれ、裏面は実をつけたコーヒーの枝の絵柄である。

その他に同一デザインでサイズが順次小さくなっていく「ブクシャ」貨(ブクシャはイマーム時代からの補助単位で一リヤルは四〇ブクシャ)が、「二〇」「一〇」「五」「一」「二分



イエメン中央銀行。他の政府機関よりもより「近代的」な建物である。

の「というラインアップであった。

その後の出稼ぎブームでインフレが進み、通貨の中心は貨幣から紙幣に移行し、コインは補助的な位置づけに転落する。こうして一リアル硬貨は一九七四年（サウジアラビアなどでオイルブームが本格化する年である）以降銀ではなくなり、サイズも一〇〇円玉サイズに縮小され、絵柄はワシの国章に変更された。

補助的な役割といっても、ダッバーブに乗るときなどにコインはやはり不可欠である。しかしコインには長い間一リアルとその下のフィルス貨（五〇、二五）しかなく、ダッバーブの公定料金からフィルスの単位が消滅し、値上げが進むと二リアルといった中途半端な額になると、とたんに釣り銭が不足するはめになる。

そうしたときダッバーブ・ドライバーたちは、キャンディーをしこたま買い込んで、釣りの代わりにこれを渡してくれる。キャンディーなど欲しくない客には迷惑だが、一度、

このキャンディーで料金を払っている人を見たので、それはそれで「通貨」として流通するようだ。銀本位ならぬキャンディー本位制である。中央銀行の権威などあったものではない。

もつとも、たいていこうした中途半端な公定料金はドライバーからの苦情で一〇リヤルとか一五リヤルとかという切りのいい数値に「改訂」されてしまう。少額紙幣は破れたり汚れたりするので、これに代わる硬貨の必要が認識され、一九九〇年代に入って従来の国章入りの一リヤルに加えて、五リヤル（図柄は中央銀行）、一〇リヤル（図柄は北部山岳地の石づくりの橋）硬貨が登場し、庶民の買い物とダッバープの支払いに用いられるようになった。北部山岳地域の景観が貨幣に採用されたのはこの一〇リヤル硬貨が初めてであり、政府の北部部族に対する気配りを指摘することができる。

紙幣

本来イスラム教は「偶像崇拜」を禁じているのだから、イスラムを国教とする国が政治家の肖像を紙幣に印刷することは「ハラーム」（宗教的禁止事項）であるはずだが、周辺のアラブ諸国の紙幣には国王や大統領の顔が印刷されている場合がある。この点南北イエメンとも紙幣の図柄に政治家や歴史上の有名人物を採用することはなく、国内の有名な景観、あるいはイエメン文化を代表するモノが紙幣を飾ることが多い。

革命後北の共和国政府が最初に発行した紙幣は、一リヤル札にはサナアの伝統的石づくりの建物（サナア旧市街は現在ユネスコによって世界文化遺産に指定されている）、一〇リヤル札には古代南アラビア王国時代のブロンズ像（シバ王国の記憶である）、五〇リヤル札にはジャンビーアが登場し、裏面にはコーヒーの木が描かれていた。

その後何回かデザインは変更されてきたが、革命後三十年間にわたって、いかにインフレが進もうとも中央銀行は一〇〇リヤル以上の高額紙幣を発行してこなかった。それでも一九八〇年代前半までは、公定為替レートが一ドル＝四・五リヤルで固定されており、このレートで計算すると八三年当時の一リヤルは約五〇円であり、一〇〇リヤル札の価値は五〇〇円相当なので、さほど問題ではなかった。しかし実際には一〇〇リヤル札は市中にはほとんど流通しておらず、少額紙幣で代用しなければならなかった。

最も流通量が多かったのはシバの女王のレリーフ像が印刷された二〇リヤル札であったが、ドルを両替に行くと、ときには一〇リヤル、五リヤル札で渡されることがあり、三〇〇ドルも取り替えると風呂敷がなければ持ち帰ることができず不便であった。

高額紙幣を発行しなかったのは政府が「出稼ぎ送金」をコントロールしようとしたからである。サウジへの出稼ぎがピークをむかえていた一九七〇年代後半にはサウジの主要都

市にはイエメン人出稼ぎ労働者専用の送金専門銀行（「ショウラク」銀行と呼ばれた）のネットワークが張りめぐらされるほどに、本国送金額は膨大であつた（貿易収支の赤字を出稼ぎ送金で埋め合わせてなお余りあつた年もある）。

しかし銀行での手続きは文盲の多いイエメン人労働者にとっては面倒だし、せっかく送金してもイエメンの地方部には支店がないので留守家族が直接引き出すことは困難である。それにそもそも見知らぬ人に現金など預けることはできないという心理的な抵抗もあつて、銀行とは別に定期的に現金を留守家族に届ける「出稼ぎエージェント」「ワキール・ムグタリビン」という職業が繁盛したのである。送金額の五〜一〇%を手数料として取るにもかかわらずこの運び屋が好まれたのは、確実に留守家族まで届けてくれることと、同郷者なので留守家族の様子、村の様子を土産話に伝えてくれる、という付帯サービスの価値も高かつたからである。文盲がほとんどのイエメン農村部では「手紙」が利用できないのでこうした消息は大変に重宝がられたのである。

しかしながら、政府としてはこの方法で送金されると送金額の実態を把握できないばかりでなく、税金なども徴収できない。そこで、高額紙幣を制限することで運び屋の仕事をしにくくしようとしたのである。高額紙幣ならポケットに入れて運べるが、少額紙幣を風

呂敷包みにして持ち歩けば、すぐに見つけることができるからである。

しかしながらこうした規制は、一九九五年に世界銀行、国際通貨基金（IMF）の指導による「構造調整」が始まり、固定公定レートが廃止されて一ドル＝一〇〇リヤル以上という実勢レートが成立すると現実的でなくなる。この結果九七年当時の一〇〇リヤル札の値打ちは八三年の五〇分の一になってしまった。さすがに最高紙幣の価値が一〇〇円では経済活動に支障が出るので、まず二〇〇リヤル札（表に古代の立像、裏にハドラマウトの港町ムカッラの景色）、九七年には五〇〇リヤル（表に中央銀行、裏にシバの女王の宮殿跡）、一〇〇〇リヤル



ビルキース神殿。この石柱列の廃墟は、シバ王国の神殿とされており、シバの女王ビルキースの名を冠して記憶されている。（マリーブ）

札（表にハドラマウトのスルタン王宮、裏にサナア旧市街の景觀）が相次いで発行された。

ここで、図柄に旧南イエメンのハドラマウト地方の景觀を採用しているのは、旧南イエメン、とくにハドラマウト地方に統一後の処遇に対する不満が高まっていたという発行当時の政治状況を反映している。また一〇〇リヤル以下（一〇〇、五〇、二〇、一〇、五）についても統一後、色やサイズには変更はなかったが絵柄の部分だけが変更され、一〇〇リヤルの表側はタイズからアデンへ、五〇リヤルの裏側はサナアからハドラマウトのシバームになった。南北の融合はまず紙幣のデザインから、である。

ところで、イエメンをめぐる回るのは銀や貨幣ばかりではない、物と物、物と曜日市

貨幣の交換の場であるスーク（曜日市）それ自体も回遊するのである。

本来、定住農民であるイエメン人は出不精である。一九七〇年代以前には、コーヒーを例外として商品作物をほとんど生産しない自給自足の農業社会であつたし、第二次・第三次産業が発達していなかったために都市に労働力需要はなく、勉強のために高名な学者に師事しようとする者以外には都市に出て行く者はほとんどいなかったのである。唯一の例外は自由港として繁栄していた国際都市アデンであつた。

加えて、国内の流動性が低かつたのは、仮に移動の必要があつたとしてもそれが物理的

にきわめて困難だったからでもある。山岳部族社会の人々は部族間抗争に備えて、安全のために切り立った山のてっぺんに十数軒から数十軒の単位で寄り添うようにして集落を形成している。こうした場合、隣りの村へ行くにもいったんワディー（涸れ谷）まで下り、それから改めて急峻な山を上って行かなければならない。

さらに、山岳部族社会では、稀少な農地・牧草地や水場をめぐる争いは頻繁に発生し、それが部族間紛争に発展する可能性はきわめて高い。このような社会状況の部族社会では、他部族の領域を無断で通過することは、身の安全を自ら危険に曝すことになる。すなわち、自部族の領域を出て旅をすることに對する精神的なバリアも大きいのだ。

このように物理的にも、精神的にも極度に流動性が不足している社会においては、日常生活に必要なものはあらかじめ自給自足で済まさなくてはならない。確かに食料は段々畑でとれるキビ、アワ、ヒエなどの雑穀を食べ、鍋は石鍋を用い、炊事の燃料は糞を固めた燃料や薪で調達し、家屋の建設には岩山にころがっている石を積み上げれば、何とか生きては行ける。しかしそれでも例えばトマトやジャガイモなどの野菜や香辛料、工業製品である衣類、アルミ製の什器などは生活に必要であるが、自給できない。しかし、遠くまで買に行くことはしたくない。

この悩みを解決すべく、「曜日市」のシステムが発達した。週に一度、集落から歩いて行ける生活圏内（といっても往復に半日かかるくらいまでは許容範囲である）の所にスークが開かれる。ここには行商人がさまざまな物資を持ち込み、伝統的な生活を営むための必需品はこの曜日市でほぼすべて揃えることができるのである。外国や国内の遠隔地、都市などで生産されるモノをわざわざ身の危険を冒して買いに行かなくても、行商人が彼らの生活圏まで届けてくれるのである。

行商人 誇り高く、血筋正しき部族民 カビリー にとつて、モノを「売る」という

行為は「名誉を損なう」ことと考えられており、カビリーはモノを買うことはあっても商売などに手を染めるべきではなく、スークでカビリー農民が自らの生産物を直売するのは不名誉なことなのだ。売るとしたら仲買人に売り、彼らにスークで商わせればよいのである。この規範はより大きな名誉を担っている部族長 シエイフ にいたっては野菜を「栽培」すること自体が「恥」アイブ であると言われるほどに徹底されている。

こうして曜日市の主役は農村部を渡り歩く行商人 バイヤア となる。行商人はカビリーよりは「名誉」シャラフ が少ないと考えられている。それは、彼らが「顧客」



スークに働く人々。肉屋（サナア新市街）、鍛冶屋（サナア旧市街）、ひき臼屋（アムラン）。ただし彼らはすべて常設市に店を構えている人々であり、行商人ではない。

という他者に依存しなければ生きていけないからであるらしい。こうして行商人、床屋、肉屋などスークで生計を立てている人（「スークの民」アハル・アル・スーク）は、カビリーより半歩ほど劣った階層に属すると見なされるのである。

行商人は曜日市の当日の朝から、鍋なら鍋、バスケットならバスケット、山羊なら山羊といった具合に専門の商品を地べたや広場に広げている。必要に応じて簡単な日除けのテントのようなものがある場合もあるが、スークにはけっして立派な建物があるわけではない。し、常設の店もないのが普通である。市が立つのは決められた曜日の午前中早くから正午過ぎまでで、最もにぎわうのは昼前後である。人の波が引ければ行商人は午後早くに店をたたみ、翌日のスークのある場所へと移動する。荷物を積んでの彼らの移動手段は、かつ

ではロバ ヒマール、ラクダ ジャマル だったが、今日では四輪駆動のピックアップトラックが主流となっている。

行商人は月曜スークのある場所から、火曜スークの場所、水曜、木曜と順繰りにめぐり歩き、一週間後にまた同じスークに戻って来る。ある程度の広がりの地域のなかには同じ曜日に開催されるスークが二つ三つある場合もあり、商人はそれぞれの顧客、ニーズに応じてどのルートをとるかを選ぶことができるので、すべての行商人が同じルートをたどっているのではない。しかしそれぞれの行商人の一週間のルートは固定されているので、買い手にとっては毎週同じ商人が同じ品



鍛冶屋（サナア旧市街地）

を同じ場所で商っているということになる。だから客とは顔見知りであり、その週に客の望む商品を持ち合わせていなくても、翌週それを調達してもって来ることができる。

行商人の一週間のサイクルのなかには比較的規模の大きい地域の中心的なスークが含まれている。こうしたスークは、地域の物流センターの機能を担っているので、たいていの

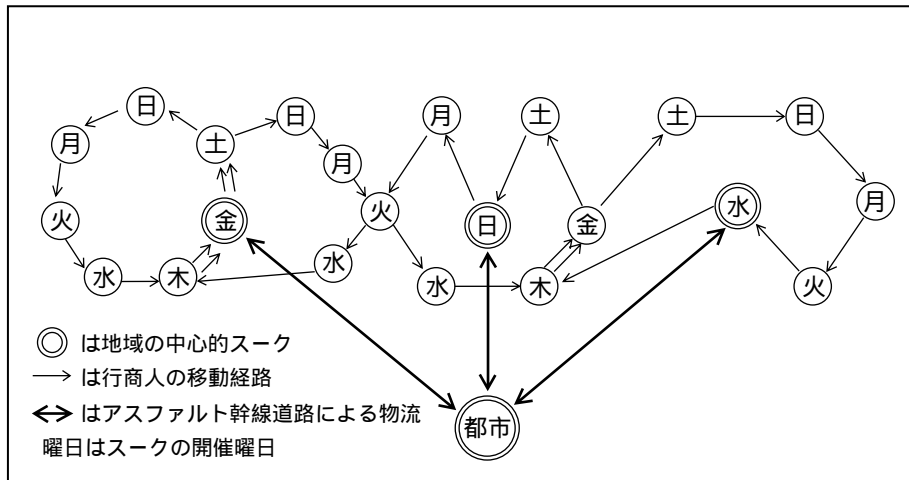


ひき臼屋（アムラン）

行商人はここで取扱商品の仕入を行い、次の一週間のサイクルを始めるのである。こうした比較的大きなスークでは、本来の市日（いちび）以外の日にも店を出して定住する人が現れ、初めのうちは掘っ建て小屋であったものが鉄筋コンクリート製になったりと、常設市に進化していく場合も少なくない。

曜日市は周辺の集落から多くの

曜日市のシステム（模式図）



（出所）筆者作成。鳥居高編『発展途上国の市場と暮らし』172ページより転載。

客が集まりやすいように交通の要衝、ワディー（涸れ谷）の分岐点などに立つことが多いが、こうした場所はほとんどの場合は何もなかったの野っ原であり、市日以外の日に行っても人つ子一人いないことが多い。それは、スークに適した「アクセスの良い」場所は二重の意味で、「名誉ある人」が恒常的に住むには適さない場所であるからなのだ。

第一に、「アクセスが良い」とはつまり「周囲から攻撃されやすい」ことを意味し、部族間・集落間抗争で不利になってしまう。第二に、さまざまな人が容易にやって来れるので「女性をよそ者の目に曝さない」という社会規範の維持が困難になる。そもそも、カビリーたちは交通の不便、水調達の不便（飲料水は山の麓まで女性が汲みに下りなければならぬ）を忍んでも、自分たちの女性を他人の目から守るために集落を山のとっぺんにあえてつくるのである。

ヒジュラ 「便利」な場所は「危険」な場所であり、スークは「危険」な場所であらざるをえない宿命にある。この矛盾を乗り越えるために、イエメン社会にはス

ークをめぐるユニークな社会的取決めが成立している。それはスークの「不可侵性」ヒジュラの確立である。まず、スーク内の「紛争禁止」が合意されている。スーク内での喧嘩、刃傷沙汰は禁じられており、仮に現在紛争中の部族民どうしがスークではったり会

つても、そこで喧嘩をしてはならないとされている。仮にスーク内で刃傷沙汰があった場合には、スークをとりしきる部族は責任をもつて加害者を処罰し、被害者に弁償を行わなければならない。もしもそうした処罰が厳正に行われなければ、それは部族の「力不足」を意味し、部族の「恥」となるばかりでなく、治安が保障されないそのスークには翌週から人々がやって来なくなるであらう。

スークは基本的にどこかの部族の領域内で開催される。普段はよそ者が招かれもせず、他の部族の領域内を通過すればさまざまな危険をともなうが、スークの行き帰りである場合には、スークを主催する部族はその顧客（他部族民であつても）の領域内の通過の安全を保証しなけ



ベイトル・ファキーフの金曜市。ひょうたんはヨーグルト作りの容器となる。女性のかぶっているのはデーツの葉で編んだ帽子である。

ればならない。

また、スークを管理する部族は、部族長 シエイフ の名において、行商人を「保護」するのである。これがあるからこそ行商人は値打ちのある商品を積んでも略奪の恐怖におびえることなく部族領域内を自由に通行することができ、スークからスークへとめぐり歩くことができるのである。一般の部族民の流動性の不足を行商人が補っているとも考えられる。

しかし、一週間のスークがすべて異なる部族の管理下にある場合には、行商人は七つの部族のそれぞれから「保護」を取りつけなければならない。人を保護するものには「名誉」があり、保護されるものにはそれがない。これが「行商人」が「部族民」よりも低くみられる一因となっている。

曜日市のシステムは、外部との接触を最小限にとどめて平和な生活を維持しようとする山岳部族民の生活の知恵と言うべきであろう。もちろん、平坦なティハマ地方でもこの曜日市のシステムが機能している。これは国内交通網が未整備で、社会的流動性が低い社会を背景として生まれた物流の仕組みなのである。しかし現在は主要幹線道路網が整備され、首都サナアをはじめとするいくつかの国内都市に車で日帰りが可能になっているし、伝統

的な行商人が扱わない品物に対する需要（家電製品など）も高まっているので、今後の消費生活のなかで、曜日市のシステムが存続しつづけていくかどうか定かではない。

ただ、現代の途上国における問題の一つが都市への過度な人口集中であり、その原因の一つに物流の一極集中があるのだとすれば、物流を分散化するための仕組みとして曜日市のシステムは現代的な意味をもつのではないだろうか。実は曜日市のシステムは国際航空業界の「ハブ・アンド・スポーク」戦略とも共通性をもっている。すべての農村に国内経済の中心部である都市から直接アクセスすることは困難である。この場合いくつかの都市部（といってもイエメンの場合、人口百万人を超えるとされているのは首都のサナアのみで、あとはせいぜい五〇万人規模の都市が三つ四つあるにすぎない）、そして地方の中心スークまでが物流の幹線網として整備されれば（これらがハブ＝軸にあたる）、後はそれぞれの大スークを結節点とする一週間のサイクルで行商人たちが農村に物資を届ければよい（これがスポークにあたる）。

一年三六五日、一日二四時間開いているコンビニがあれば便利だと思つのも一つの消費文化なら、週に一度だけ商品が自分の生活領域に確実にやって来れば十分だと思つのも消費文化である。実際、品物が自分たちの領域にやって来ることの利便性は捨て難い。

曜日市のシステムは、都市への集中という一方的な方向での社会的流動性の増大を抑えつつ、国内物流を改善し、地方部の生活水準を向上させるための新たな開発戦略として用いることができるのではないだろうか。同時に「過消費」という現代文明の病理を予防する方策としても興味深い。商品のあるところに人を引き寄せるのではなく、人の住むところに最小限の必要物資を供給する（それも計画経済的な仕組みではなく、完全に民間のイニシアチブで）という戦略は、都市化に対する一つの抵抗の姿としてモデル化できるかもしれないと思うのである。